
墮胎行列

Snawe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮胎行列

【Nコード】

N2183T

【作者名】

S n a w e

【あらすじ】

とある胎児は夢を見ていた。

1

何もかもが堅甲な空間だった。

パネルラインが壁一面に彫刻された、鉄製でひどく冷気の漂う空間である。

壁面は艶の無い黒に統一されているが、筋彫りから漏れ出す青白い光により、空間の全貌をかりうじて伺い知ることができ、ほの暗く反射する床面を追えば、そこには不意にダクトのような穴が開いている。

しかし、その中を通行することが出来るかというと、それは何としても不可能な程度に穴は狭く、結局のところこの部屋は立方体の密室と言って何ら相違ないものであった。

彼は恐らく、この空間にて今の今まで生きてきた。

何かを食べるでも、考えるでもなく、それでも何故か彼はただ満ち足りて、今日とて生きてきたのだ。

足元を見れば、自らが成長するより以前に穴に入り、ここ以外へと辿り着けたであろうことについて考えることはあっても、それに執着すること……後悔はあるはずもなかった。

つまり彼はこの密室において自由であった。

彼がとある囚人と唯一異なっていた点は、現在にひとつの心配もなくただ、解放された心身を持っていたというそれに終始するだろう。

2

空間は直方体だった。

夜半の事である。

偶発として眠りから覚醒した彼は、虚ろでぼんやりとした視界に確固たる暗闇が有り得ることについて、ひどく混乱した。

光量である。それは彼が眠っている間にこの空間が拡大したという証拠にこそなったが、この向上について彼は、恐怖や不安に起因する狼狽を発気させたのだ。

彼の眼球は、強いて暗闇の先を見透かそうと活発であつたが、それは叶わなかった。

しばしの停止が訪れる。

……

そうとなると、石のように凝固していた身体は、再びあるべき液体へと、還元を遂げようとしていた。

それは彼がこのごく短時間で修得した、一種の覚悟を意味する。

あろうことか、彼は自らの意志で、黒陶々へと身を投じることにしたのだ。

全身から流れ出る汗だが、その決意を挫いてみせるにはあまりにも非力だった。

3

彼は何となく、空間を包囲する静寂を破りはせず、歩いた。

その間、彼の感覚を支配していたのは、高く脈動する心臓だった。

つまり生意識である。彼は恐怖を以てして、水分と可塑に満ちた存在を自覚し得たのだ。

そして脈動は最高潮に達する。

暗闇に近づくことで、彼は紛れもない、異常の輪郭を掴んだ。

それは人間のようにであった。

そしてその影が、自分より小柄であるという事を察知するなり、彼はまず詰まりきった息を全て吐き出す。

矢継ぎ早に鼓動が落ちていくのを実感すると、彼はあくまでも能動的であることを示す、行動をやってみせた。

「……君は、誰だ？」

影とは女だった。

彼の呼びかけに対し、その影は間髪入れず、

「あは」

と乾いた、歓喜の声を上げた。

「あなたは、そろそろ死ぬの」

彼は僅かに憤った。

全てに優先するような納得は得られず、あまつさえ女は、突拍子で不用意な生への侮辱などを宣卷いたのだ。あまりにも無粋な挑発と取れた。

しかし、男は幸いな事に、それほど気の短い傾向はなかった。ひそかに眉を顰めつつも、最良の応対を導き出したのだ。

「どうして死ぬのか、教えてはくれないか」

女は静かに、息を吐いた。

「この世に生まれ出る生命は、向上せずにはいられないの」

「だから、あらゆる活動の根幹には向上しようとする……信仰がある」

「そしてそれを放棄したこと。墮天じゃなくて墮胎。これが死因」

途端、彼は彼の生意識が、少しの余韻とともに消えいったのを感じた。

拒否反応はなく、脳髄へ呆気なく入り込んだ事実が紛れもなく、そうさせたのだ。

つまり彼は、何もかもが明晰夢であることを悟った。

衝撃はあるはずもなかったが、それから彼は、自らの行為がひどく滑稽に思えた。

すなわち彼の夢の顛末は、ひたすらに落下を試みるだけだったのだ。

そして彼はこの女が、ついに落下をもたらすものだと言じた。

おもむろに影へ手を伸ばすと、女はそれを伝って青白い指を彼の肩ほどへ到達させ、そのまま身ごと、冷たい闇の中へと落としてしまった。

それこそが、全てに優先しうる納得であった。

小さな世界も女も、根源こそ同一のものなのだ。

ただ、物を入れる容器が生である必要がなかっただけのことである。

もっとも、自分がなぜ、ここまで非生産的な行為に耽っているかというそれだけが、彼には合点のいかないものであったのだが、それについては常識だろう。

終末を迎えるにあたって、よほど生産的なことを考える人間はいない。

全身を駆け巡る快楽は、やがてその五感ごと、ノイズ混じりの断片的なものに変貌していき、その末には――

夢は覚めるものなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183t/>

堕胎行列

2011年10月6日02時14分発行